

回 会 報

148号

新日本美術協会

第三十八回新日美展を終えて

実行委員長 大石 亨

第三十八回新日美展は十月四日〜十一日つつがな
く終了しました。

展示作品、絵画・工芸合わせて二六八点、観客
数約四九〇〇名。展示作品数は昨年に比べ、やや
減少したものの、いずれも昨年に勝る個性あふれる
力作ぞろいでした。

五日の懇親会はいくとも十八号台風に襲われ
大雨でしたが、八〇余名のかたが参加して大盛況で
した。表彰式に続いて、芳賀文治(元東京造形大学
教授)、中野中(美術評論家)、両先生から「総体的
に昨年から又一段と前進した」との講評を頂きま
した。

本展が目指した、作者と観客とが一体となった
全員参加の展覧会に、今回は例年と比べ一段と盛
り上がりを見せたものと確信しました。

芳賀先生によるトークも例年、一号室から始め
るところを今回は会友並びに一般の出品者の多い
七号室から八号、九号室と行いました。したがっ
て、若い会友、初出展の一般の人たちが自作品の前
で先生と向かい合い、いろいろな意見を交わし、指導
を受けました。これが中々好評でした。お陰で帰る
時大勢の方々が「有益なしかも楽しい一時を過ご
させていただき有難うございます」との言葉を残し
てくれました。来年はもっともっとイイ絵を展示し
てイイ展覧会にするべく、又一年努力しましょう。

三十八回展総評 (要旨のみ掲載)

外部委嘱審査員 中野 中先生

千利休は何千何百の枝を切り落とし、たった一輪
だけをいけて客人をもてなしたという。この意図は

事務局
千葉県柏市大津ヶ丘
3-17-17-401
森屋治三方
TEL.04-7191-6760

編集委員
小高峯夫
富岡ネム
大石 亨
四方公子
早田美智子
原稿常時募集
次号平成27年2月予定

余分を極限まで廃し簡潔なインパクトを与える
という下心があったと思われる。まともな解釈で
は多くを語るより一輪の花に真心をこめるとい
う事であろう。

作家の皆さんは花、風景その他いろいろのモチ
ーフを描くのに、対象物を再現するだけでは作
品にならないことは百も承知だと思ふ。最初に
感じた対象の魅力は何だったのか、形なのか色だ
ったのか、又はわび・さびなどの様相なのか、など
絞って自分で分の中で表現のイメージを明確に
してから描く方が、そこに自分の人生観、宗教観
やこれまで生きてこられた経験、知性などが表
現されてくると思ふ。自分が生きている町の風
土、楽しい出来事、世間の出来事そこに自分がい
る。そういう事が感じられる作品が出来ればいい
と思ふ。三十八回展が終わり、四十回展が見え
て来た。

外部委嘱審査員 芳賀文治先生

大きく二点について申し上げます。一点目は
友人から聞いた話、ある会で、知事賞を申請した
ところ認可されるまでに相当時間がかかった。役
所の人が事情調査に来たり、色々な手続きや書
類を作成提出してやっと今年から知事賞を出す
ことができたという。

新日美は相当長く前から文部科学大臣賞、東
京都知事賞、都議会議長賞など大きな賞を得て
いる、これは大変名誉のあることで誇りにし、大
事にしてもらいたい。

二点目は作品についてですが、個々に付いては
会場それぞれ申し上げたので省略します。全
体的には年々作品の質が高まって来ていると言
う事、表現が豊かになって来ていると思ひます。

展示の仕方でも大変いい。出品された作品は殆ど具象作品だ
が、具象絵画ではやはり描写力が必要で、そして形、色、配
置、組み立て構成が出来てないとい作品とはいえないと思ひ
ます。いくら独断と偏見だと言つても描いた内容が第三者に
伝わらないのでは独りよがり終つてしまひます。何よりも
継続努力して制作し出品して頂きたい。

三十八回展審査所感

副審査委員長 絵画部門 山下利隆

公孫樹(いちよう)の実が大地に還る頃上野での新日美展が
始まり、そして成功裡に終わることが出来ました。森屋事務
局長初め数多くの熱意ある人のお陰です。苦労様でした。

審査に当りましては今回も残念ながら中尾会長の体調が
思わしくなく、臨時代理として小生が代行いたしました。二
日間に亘り、外部委嘱審査員の中野中、芳賀文治両氏に参
加頂き、内部審査員十五名と合わせて十七名で審査を行
い、絵画部門の選入作二一〇点の作品を審査手順により真剣で
丁寧な審査を行いました。方法は記名投票と討論による多
数決です。審査員の心模様も色々です。満票など獲得する
作品などありません。上位五点は得票では互角の状況とな
りました。絵とは何者でしょうか、自分自身の心を色、線、
面等を用いて夢中に描くことかな、ふと考えたりすることが
あります。豊饒な畑を求めて。

副審査委員長 工芸部門 富岡ネム

毎度のことだが、終わつてみて「これで良かった」と思つたこ
とはない。時に予期せぬ作品がきて、工芸台が足りなかつた
り、上下逆に飾つてしまつたり、割れ物や細工物には特に気
を遣う。今年度は搬入時に写真を撮つた。また出品数は事前に
心配した下降線を辿らずにほととした。新日美ホームページ
様々まである。

一口に工芸と言っても多岐にわたる素材とジャンルは年々
増加し、絵画とのほつきりとした境界線が見え難くなつてい
る。いや分断線などないのではないかと。我が会について言え
ば作家各自の判断に委ねる現状から伺える。中野先生の講評
にもあつたように「工芸部は良い意味で個性的、悪く言えば
滅茶無茶」表現が画一的でなく面白いのだろう。これは皮肉
以外の何物でもない。が新日美の現状をみれば出品者数、出
品数をとるか、作品の質をとるか、審査員も頭を抱えること
ろだ。絵画の中に彩りを添え、華やかな舞台と豊かさをもた
らしているのが工芸、と胸を張つて言える様にやるしかない。

委員コラム

相楽富美子

偶然のことです。ごいすね。今
思うと友達と上野美術館へ展覧会
を見に行つた帰り、ふと足をとめ
「入場無料」の看板が目に入り、入
つてみたところが新日美の前身で新
洋画会の第五回展。一室の展示は
一人二点づつ100号以上の作品が
力強く並んでいました。あまりにも
素晴らしいので友人共々びびり、
二人はだいたい大きな声を出して
のかもしれない。委員の方が会に
入りませんかと声をかけて下さい
ました。その場で事務所に通され
入会することになっていました。そ
のくらい心があらゆる面々興奮して
いたと思ひます。

その後会は分裂こそしたが今年
38回展を無事迎え、私は趣味と
して好きな絵を描き続け出品して
きました。その間楽しい時や人生勉
強になるねと言つたこともありまし
た。いちばん心に響く一言は、私が
賞候補の通知(その頃あつた)をなぜ
か持つていた時、先輩が私に言つた
こと「上野美術館の壁は有名な人
たちの作品も飾ることが出来るよ、
そこへ自分の絵を飾ることが出来る
事はとても素晴らしいことだと思
う。絵を続けて描いていけばなんと
かなるから」とその時の私の背中を
押ししてくれました。

その言葉は今でも忘れることは
ありません。その後も同じ年に入
会したことで親しくしていただいた
鈴木健夫様(現在特別会員)は老
人ホームに入つても絵を続けて描い
ておられます。その姿勢を私は生
き方の目標にしたいと思ひます。
その時の自分の状態にあつた描き
方で楽しんでいくことが出来ればそ
うありたいと思ひます。